

# はっきりお話できる子

— 読み書きの指導を並行して —

谷 本 裕 子

## 1. 対象児の実態

K・S子 昭和50年1月28日生(6年女子) 家族構成 両親・妹(小4)弟(小1)

医学的所見 ダウン症候群 M保育園に1年10ヶ月通園・卒園後本校小学部に入学。

遠城寺式発達検査 移動運動4:8以上 手の移動4:4 基本的生活習慣4:8以上

対人関係4:8以上 発語3:4 言語理解3:4

特徴 ○歌・踊りを好み、模倣や身体表現が優れている。

○物事に意欲的に取り組む反面、自信のないことに直面するとすぐあきらめたり、人に頼るなどの逃避の言動がみられる。

○恥かしがりで人前に出るとうつむいて話せないことがある。

○ひらがな文字は、ほぼ正確に読み書きができる。

○単語の発音は、サ行・ラ行に弱さがあるものの、誤音はみられない。

○文章・会話の発音は、不明瞭で聞き取りにくい。(わたしは××××をしました。)

## 2. テーマ設定の理由

我々は、日常生活の中で絶えず言葉を使って生活している。自分の意思・感情・要求をことばで表現することは、社会生活を営む上で大変重要なことである。コミュニケーションが深まり、人間関係が円滑になり、欲求が満たされる。ところが、一般的に言って精神薄弱児は、言語能力が劣り自分の欲求が通らない状態が多いと言われている。

ダウン症児であるK子も、発達検査で示すように、他の運動や社会性の諸能力に比べて言語能力の遅れが目立つ。一般的な認知能力は高いが、ことばで表現しようとする、不明瞭で聞き取りにくくなる。あふれるように自分の思いを持ち、話す意欲も大きい、自分の意志が相手に正確に伝わらないために会話が成立せず、話す意欲を失ったり、落ち込みの原因となり、生活・学習に支障をきたすことも、しばしばみられた。

そこで、「言語の向上を図る」という個人目標を設定し、自分の意思を、はっきり伝えることを目指して、この研究に取り組んだ。

## 3. 指導の重点と方法

K子の実態から、次のような仮説・指導方針をたてた。

仮 説

○緊張により、早口になるのではないか。

○場・状況に適した言葉を知らなくて、欠語するのではないか。

○話す内容を意識せず話しているので、不明瞭になるのではないか。

**指導方針**

- ゆっくりと大きな声で話すことを原則とする。
- 興味のある絵本を読ませ、正しい発音の練習をする。
- 人前で話す機会を設け、適度の緊張感を与える。
- しりとり・カードゲームなどのことば遊びを通して、語い数を増す。
- 日記・作文指導を通して、文法・文章構成力を高めると共に、ことばの意識化を図る。

**4. 指導実践**

(1) 生活単元学習を通して

小学部最高学年であるK子は、各行事の司会・あいさつ・劇の主演級の役を与えられることが多い。恥かしがりやで、人前で話すことが苦手なK子にとって、大勢の人の前で話をするのは、大変なプレッシャーかもしれない。しかし、緊張の場を数多く踏み、場に慣れることで、緊張を解き放ち、落ちついてゆっくり話せるようになるのではないかと考えた。

① 新入生を迎える会（4月）

自己紹介と始めのあいさつ・終わりのあいさつの役を与えられた。ひらがな文字が読めるK子なので、黒板・紙に書いた文字を見ながら話すことからはじめ、暗記して内容を把握しながら話す。そして、落ちついてゆっくり話す。という段階に分けて指導した。

（変容）

経過	教師の手立て	K子の様子
4月9日	○黒板に自己紹介文を書く。 わたしは○○です。○ねんせいです。どうぞよろしく。	○黒板を見ながら言えた。初めての練習で、恥かしそうに下をむいていた。
4月10日	○わ・た・し・は・と一音ずつ切ってゆっくり話すよう指示する。	○「6ねんせい」を「5ねんせい」とまちがえて言う。まねをしながらゆっくりと言う。
4月19日	○「上手に言えたね。」とほめ言葉をかける。	○暗記して正しく言えた。ほめられてうれしそうにしていた。
4月20日	○あいさつ文を紙に書き、くり返し練習をさせるとともに家庭に協力をお願いする。	○紙を見ながらゆっくりと話す。むかえる会を④⑤と読みまちがえる。
4月23日	○合同練習。上手に言えて、他の先生にほめてもらう。	○自己紹介・あいさつ共に、ゆっくりと大きな声で言えた。先生方にほめられ、得意満面だった。
4月24日	○当日 ○あいさつは、小声で援助する。	○あいさつは、教師に助けを求め一緒にしたが、自己紹介は、はっきりと大きな声で言えた。

その後、7月12日の湖山小学校との交流学习では、新入生を迎える会でおこなった自己紹介のことばを覚えており、数回の練習で、まちがえずにはっきりと言えた。また、10月9日、予防接種を受けた際、医師に対して自分の方から、あいさつ・自己紹介ができた。

② 学習発表会（11月）

小学部合同の劇「ねずみの嫁入り」で、一番セリフの多いお母さん役に決まった。7月の七夕発表会で、クラス劇「うらしま太郎」の乙姫役を演じ、本年2度目の劇経験である。「うらしま太郎」の時は5つのセリフがあったが、今回は18こ（くり返しを含む）と増えた。最初は、教師の動作・セリフの模倣からであったが、だんだんと援助を減らし、当日は、きっかけを与えるだけで、セリフが言えるようになった。そして、意識をしながら、ゆっくりとセリフを言い、練習の成果を充分に発揮した。

次の表は、劇指導の過程を表わしたものである。

＜1段階＞

セリフを憶えていない。  
声が小さい。うつむいたまま。

手立て

教師が一音一音きって話し模倣させる。

＜2段階＞

教師についていまわをする。  
早口になり、聞き取りにくい。

手立て

一語一語きって言わせる。

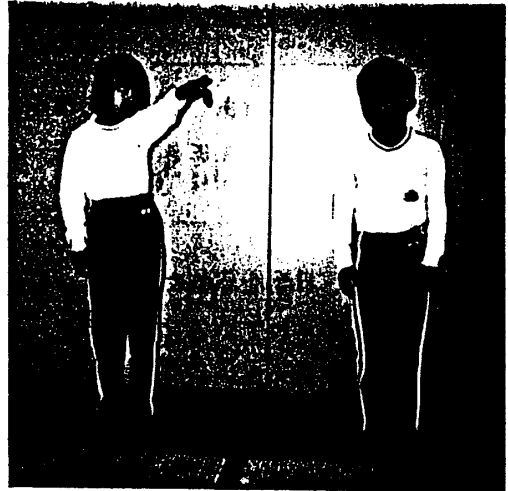
＜3段階＞

ほぼセリフを憶えるが、ところどころ  
他のセリフと混同するところがある。  
○おむこさん (㊟) だれに……  
↓  
○おむこさん (㊤) なんて……  
○「ちゅうこ」と「むすめ」を混同。

手立て

(㊟)・(㊤)と教師が声かけをして、きっかけをつくる。  
「ちゅうこ」を「むすめ」にかえ、セリフを統一する。

セリフと動作が一致し、自信を持って大きな声で言える。  
ゆっくりと話すべきところは、ゆっくりと言えるようになった。→意識化  
はっきりとセリフが聞こえるようになってきた。



劇練習をするK子

このように、新入生を迎える会での自己紹介・あいさつ・学習発表会での劇の成功は、反復練習でついた“自信”がもたらしたと思われる。模倣 → 反復 → 理解・思考 → 意識化 の段階を経て、先を見通せる余裕と自信が、緊張を解きほぐし「ゆっくり言うことを意識しながら話す」という結果に結びついたと考える。

(2) 個別指導を通して

毎週2回、個別学習の時間をとり、一対一の学習を続けた。K子が非常に興味をもっている絵本を使って音読させ、誤音矯正に努めた。文章を読むにしたいが、次のような実態をつかんだ。

- ・のぼります。→ のぼって (いきます)。
- ・おうじが → おうじ (さま) が
- ・きたのです。→ きました。
- ・～してる → てるてるぼうず

このような実態から、ことばを置換・省略したり、関連語を話すことが、パターン化しており、発音の異常に関係していると考えた。そのパターンを崩すために、作文指導を試みた。字を書くことによって、正しい言葉、話す内容が意識づけられていくのではないかと考えた。言葉・内容を意識しながら話すことが、はっきりとお話することにつながる。と考えたからである。

K子は、毎日の生活ノートに、日記を書いているが、そのほとんどは母親と一緒に書いたものである。個別学習では「〇〇と△△をしました。」という文章からはじめた。教師の助言は、「なにをしたのかな」「昨日どこに行ったのかな」ぐらいの問いかけにとどめ、K子に考えさせる場面をつくった。はじめの頃は、「いやだ」「わからん」とすぐにあきらめていたが、くり返すうちに、「こどものくに」「いった」と言葉に出して言いながら書けるようになってきた。

(生活ノートより)

(注)

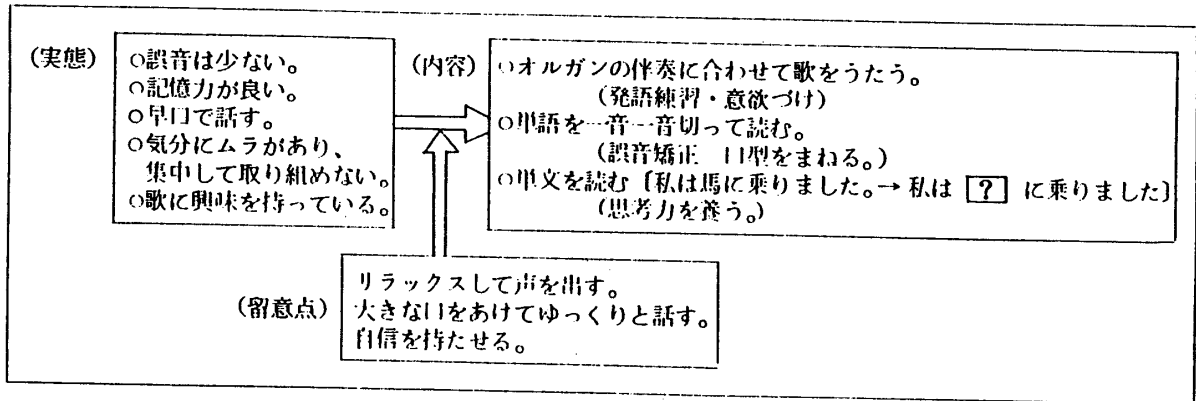
いけがみのおばあさんとあそびをしました。  
 おとうさんがむえにきました。  
 たよしかた。

(池上のおばあさんと遊びをしました。  
 おとうさんがむえにきました。  
 たのしかた。)

これは、日記を忘れたある日、自由時間にこっそりと書いたものである。教師の指導は全くない。まだ、省略されている言葉もみられるが、自分の書きたいことを、一人で書けるようになったのは、この日(10月23日)がはじめてである。自分の意思を表現できたことは、大きな進歩である。まだまだ、完全とは言えないが、徐々に定着しつつある。

(3) 養・訓を通して

K子は10月より、言語指導の専門家について、養・訓をうけている。週2時間(計18時間)で、「発音の明瞭化」を目指して指導が続けられている。指導内容は次の通りである。



5. まとめと今後の課題

一年間、ゆっくりと大きな声で話すことを原則とした「読み」の指導、意思の表現化に視点をあてた「書く」指導に力を入れて研究に取り組んできた。くり返しの中で自信をつかみ、心の余裕を持って臨んだ、あいさつ・劇練習。ゆっくり話すことが意識づけられ、定着しつつあるようだ。劇の一段階の頃と当日を参観された養・訓の先生から「ずい分、はっきり話せるようになった。」と評して頂いた。一方、表現力の面でも進歩がみられた。K子がとてもかわいがっていた猫「クロ」が急死した翌日、「クロが死んだ。ヒクヒク(けいれんのこと)しながら、二階から落ちた。」と涙を浮かべながら話してくれた。また、校外学習では、他校生に「こんにちは」と、はっきりあいさつができた。このように、自発的に意思が表現できるようになってきた。指示がなければ動けなかった一学期には、見られなかったことである。

しかしながら、残された課題もある。ことばを、置換・省略したり、関連語を話す、という点は依然として顕著に見られる。また、語い不足も指摘されるところである。そして、苦手で自信のないことになると尻込みする、という精神面の弱さも、ひとつの問題点として取り上げられよう。これらの問題点をひとつひとつ克服し、豊かで楽しい言語生活を送れることを願いながら、K子とともに課題に取り組んでいきたい。